

—国内動向—

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向（令和8年9月）

【ポイント】

- 気温は、西日本と沖縄・奄美で高かった。降水量は、東日本太平洋側でかなり多かった。日照時間は、東日本日本海側と東・西日本太平洋側でかなり少なかった。
- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷量は10万2857トン、前年同月比97.5%、価格は1キログラム当たり311円、同96.9%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷量は3万4105トン、前年同月比96.4%、価格は1キログラム当たり277円、同95.8%となった。
- 晩秋から初冬は、降雨の影響により、全体的に入荷が安定せず、品目によっては入荷量が少なく、年明けまで高値傾向で推移すると予想される。

（1）気象概況

月を通して秋雨前線が東日本太平洋側を中心に停滞することが多く、上旬は台風第24号や湿った空気の影響で秋雨前線が活発化し、東海地方などで線状降水帯が発生し、記録的な大雨となった所があった。さらに下旬は、台風第25号の影響で関東甲信地方を中心に記録的な大雨となった所があったほか、下旬後半は台風第26号の影響もあり、東・西日本を中心に曇りや雨の日が続いた。

このため、月降水量は東日本太平洋側でかなり多く、東日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。東日本太平洋側では、月降水量平年比が236%となり、1946年の統計開始以降、9月として1位の多雨となった。

月間日照時間は東日本日本海側と東・西日本太平洋側でかなり少なく、西日本日本海側で少なかった。東日本太平洋側では、月間日照時間平年比が46%となり、1946年の統計開始以降、9月として1位の寡照となった。一方、北日本日本海側では中旬を中心に移動性高気圧に覆われて晴れた日が多かった。このため、北日本日本海側の月降水量は少なく、月間日照時間は多かった。

上旬は北・東日本を中心に冷涼な空気が流

れ込んだが、下旬は全国的に暖かい空気に覆われやすかった。このため、月平均気温は西日本と沖縄・奄美で高かった。

○平均気温は、西日本、沖縄・奄美では高かった。北日本、東日本では平年並だった。

○降水量は、東日本太平洋側ではかなり多かった。東日本日本海側、西日本太平洋側では多かった。北日本日本海側では少なかった。北日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美では平年並だった。

○日照時間は、北日本日本海側では多かった。東日本日本海側、東日本太平洋側、西日本太平洋側ではかなり少なかった。西日本日本海側では少なかった。北日本太平洋側、沖縄・奄美では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

（出典：気象庁HP「2026年9月の天候」）

図 1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
東日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			
西日本				日本海側 太平洋側		日本海側 太平洋側			

資料：気象庁「9月の天候」

1 平年を上回る水準			
2 平年並み			
3 平年を下回る水準			

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷量は10万2857トン、前年同月比97.5%、価

格は1キログラム当たり311円、同96.9%となった（表1）。

表 1 東京都中央卸売市場の動向（9月速報）

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	102,857	97.5	92.0	311	96.9	103.9	281	310	344
だいこん	7,186	92.4	92.7	120	86.7	87.9	111	120	127
にんじん	6,766	105.3	104.5	130	87.0	80.0	129	131	131
はくさい	6,421	98.1	78.2	128	112.4	117.4	80	131	176
キャベツ類	14,439	90.5	88.9	110	126.0	122.4	101	107	124
ほうれんそう	570	103.8	82.1	1,037	103.0	113.6	879	1,129	1,096
ねぎ	3,758	107.4	96.9	384	83.7	91.9	345	389	415
ブロッコリー	1,573	89.4	93.2	664	100.7	106.2	643	676	673
レタス類	6,682	76.0	78.1	314	154.2	133.6	188	314	463
きゅうり	5,262	84.9	77.4	465	103.7	125.0	420	495	486
なす	2,486	81.2	85.4	418	99.2	107.6	369	455	435
トマト	5,525	111.6	99.9	546	84.1	96.8	527	572	540
ピーマン	2,156	84.3	88.0	420	91.8	88.4	365	416	498
ばれいしょ	7,465	118.7	119.4	137	84.4	87.9	133	135	143
さといも	390	81.6	61.3	435	109.5	123.1	410	442	448
たまねぎ	10,074	139.1	111.0	97	57.6	80.1	96	98	97

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注1：平年比は過去5カ年（令和3～7年）平均との比較。
注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの北海道産の生育が回復し安定した入荷となった。需要もあったことから価格は前月から上昇した（図2）。

葉茎菜類は、はくさいが入荷が順調だった前半から一転、中旬以降は長雨の影響により長野産の入荷が不安定となり価格が急激に上昇した（図3）。

果菜類は、きゅうりが長雨や日照不足により着果率や正品率が低下し価格が上昇した（図4）。

土物類は、ばれいしょが北海道産が天候に恵まれ豊作基調で入荷が増え、価格は前年を下回って推移した（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

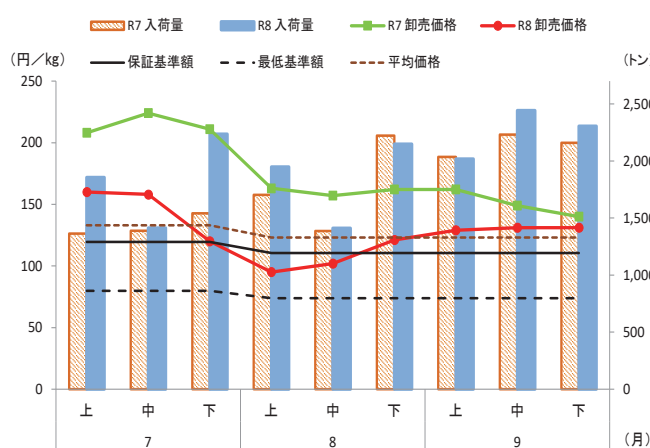


図3 はくさいの入荷量と卸売価格の推移

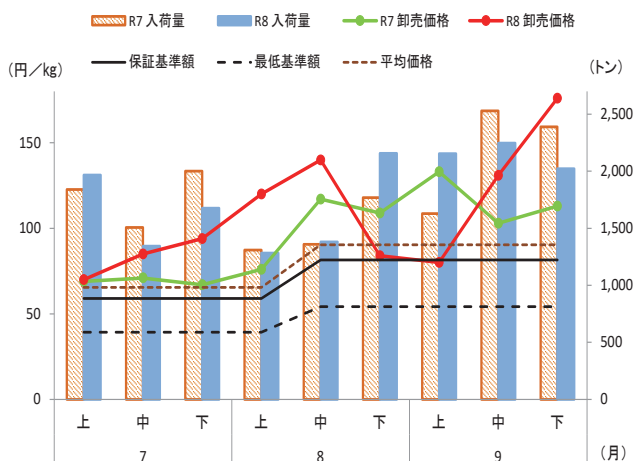


図4 きゅうりの入荷量と卸売価格の推移

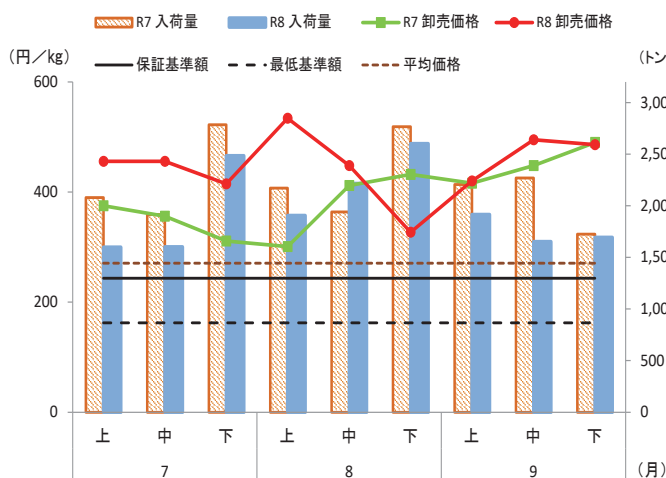
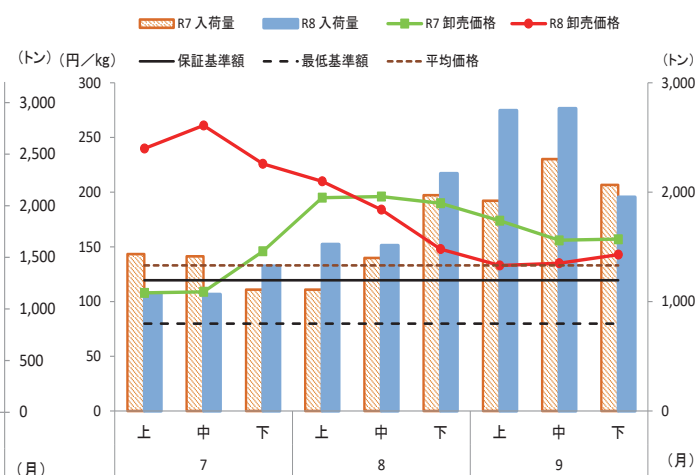


図5 ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

注1：卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

注2：平均価格とは、事業における過去6力年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数などを加味した価格である。

注3：事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）が保証基準額を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	9月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産、青森産中心の入荷であった。北海道の作付面積は前年並みで、道南地区はやや降雨の影響があったもののおおむね順調であった。青森産の作付面積は前年を上回った。夜温の低下での肥大不足による遅延はあったが、極端な高温がなく適度な降雨もあったことから生育は順調であった。総入荷量は少なかった前年、平年ともにかなりの程度下回った。 価格はやや高値で推移した前年を1割以上下回り、平年を1割以上下回った。
	にんじん 	北海道産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、道南地区はやや降雨の影響があるが、生育はおおむね順調であった。干ばつの影響による肥大不足からはやや回復傾向となった。輸入の中国産は前年をわずかに下回った。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年もやや上回った。 価格は月間を通してほとんど動きはなく、やや安値で推移した前年をかなり大きく下回り、平年を2割以上下回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、9月の長雨の影響により生育が停滞し、やや小玉傾向であった。一部病害が散見される。後続の茨城産は長期の長雨と台風による圃場の水分過多により作付けが遅延した。出荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年を2割以上下回った。 価格は中旬以降高騰し、やや高値で推移した前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。
	キャベツ類 	群馬産を中心に岩手産などの入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、台風および曇雨天の影響で滞水しやすい圃場を中心に生育が停滞しておりやや小玉傾向であった。岩手産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、曇雨天の影響により一部べと病が散見された。また虫害が平年より多く見られている。総入荷量は前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は下旬に向け価格を上げ、やや安値で推移した前年を2割以上上回り、平年を2割以上上回った。
	ほうれんそう 	群馬産、栃木産中心の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であったが、8月下旬以降の曇雨天や局地的な豪雨、台風の影響で局地的に減少した。また病害が散見された。栃木産の作付面積は前年並みで、曇雨天の影響でやや軟弱徒長気味であった。気温も低かったことから耐暑性のある品種が適合せず、生育はやや不良であった。長期にわたる曇雨天および台風の影響で、茨城産を中心に秋冬産地の遅延が懸念される。総入荷量は大幅に少なかった前年はやや上回ったものの、平年を大幅に下回った。 価格は、中旬以降急激に上昇し、高値で推移した前年をやや上回り、平年をかなり大きく上回った。
	ねぎ 	秋田産を中心に青森産、北海道産の入荷であった。秋田産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、8月の曇雨天による多湿の影響で病害の発生が平年より多かった。青森産の作付面積は前年をやや上回った。日照不足による肥大不足が見られる。また降雨の影響による病害散見も生育はおおむね順調であった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であった。輸入の中国産は前年を4割以上下回った。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度上回ったものの、平年をやや下回った。 価格は秋商材として需要期に入り、旬を追うごとに上げたものの、高値で推移した前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度下回った。
	ブロッコリー 	北海道産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であったが、一部地域で7月の天候不順による品質低下が散見された。総入荷量は、前年、平年ともにかなりの程度下回った。 価格は、やや安値で推移した前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。
	レタス類 	長野産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、長雨、日照不足により生育が遅延した。小玉傾向で正品率も低下し、病害も散見された。後続の茨城産についても長期の曇雨天および台風の影響で数量減、品質低下が懸念される。総入荷量は、前年、平年ともに2割以上下回った。 価格は中旬以降、絶対量不足から高騰し、やや安値で推移した前年を5割以上上回り、平年を3割以上上回った。

果菜類	きゅうり	福島産を中心に群馬産、岩手産など東北産および関東産抑制物の入荷があった。福島産の作付面積は前年並みで、7～8月の曇雨天の影響で樹勢低下が見られる。形状不良果の発生が多いほか、多湿下での生育から病害が多く、虫害も散見されている。群馬産の作付面積は前年並みで、定植期の曇雨天の影響で生育はおおむね順調であったが、樹勢の低下や果実肥大の遅れが見られた。また病虫害も散見された。岩手産の作付面積は前年並みで、低温および日照不足の影響による生育遅延、樹勢低下が見られた。また病虫害が散見された。総入荷量は少なかった前年をかなり大きく下回り、平年を2割以上下回った。 価格は中旬以降に高騰し、高値だった前年をやや上回り、平年を2割以上上回った。
	なす	群馬産を中心に関東の露地作終盤の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、台風の影響で傷化やすれが発生している。出荷量が落ちたほか、病虫害も散見された。関東産全般に台風の影響での品質低下、また病虫害の発生が見られた。全般に回復基調だが終盤のため数量は伸びなかった。後続の高知産は一部病虫害が散見されるがおおむね順調であった。総入荷量はやや多かった前年を大幅に下回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、中旬以降に上昇し、やや高値で推移した前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。
	トマト	北海道産を中心に福島産、群馬産などの入荷であった。北海道産の作付面積は前年並みで、一部曇雨天での着色遅れが散見されたものの順調であった。福島産の作付面積は前年並みで、高温による花落ちなどが散見されるものの生育はおおむね順調であった。病虫害の発生が散見された。群馬産の作付面積は前年をやや上回った。一部日照不足の影響や一時的な高温による花飛びなどが散見された。総入荷量は少なかった前年をかなり大きく上回り、平年並みとなった。 価格は、高値で推移した前年をかなり大きく下回り、平年をやや下回った。
	ピーマン	岩手産を中心に茨城産などの入荷であった。岩手産の作付面積は前年並みで、8月下旬以降の日照不足により樹勢の低下や変色果が散見された。茨城産の作付面積は前年並みで、曇天続きにより遅延気味であった生育は回復傾向でおおむね順調であった。福島産の露地作は生育遅延傾向であった。総入荷量は少なかった前年をかなり大きく下回り、平年もかなり大きく下回った。 価格は下旬に向け徐々に価格を上げたものの、前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。
土物類	ばれいしょ	北海道産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育順調で豊作基調であった。総入荷量は前年、平年ともに大幅に上回った。 価格は月間を通してほとんど動きはなく、やや高値で推移した前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく下回った。
	さといも	千葉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、千葉豪雨の影響で収穫作業が進まず1～2週間遅延した。生育については肥大もよくおおむね順調であった。病害が一部見られるが大きな影響はない。後続の埼玉産は適度な降雨で肥大よく、生育は順調であった。降雨の影響で収穫が不安定だが、上・中旬より開始された。輸入の中国産については前年を5割以上上回った。総入荷量は少なかった前年を大幅に下回り、平年を4割近く下回った。 価格は堅調な推移となり、高値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年を2割以上上回った。
	たまねぎ	北海道産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、天候に恵まれ肥大よく、サイズはL大中心で豊作基調である。輸入の中国産は前年を6割以上下回っている。総入荷量は少なかった前年を4割近く上回り、平年をかなり大きく上回った。 価格は、潤沢な数量から安値が続き、高値で推移した前年を4割以上下回り、平年を大幅に下回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷量は3万4105トン、前年同月比96.4%、価

格は1キログラム当たり277円、同95.8%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(9月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	34,105	96.4	90.8	277	95.8	103.8	253	275	308
だいこん	2,553	102.5	96.1	131	91.6	97.0	119	131	141
にんじん	2,624	112.3	100.9	129	95.4	81.5	126	132	128
はくさい	3,295	97.5	84.3	120	106.6	113.3	80	126	164
キャベツ類	5,115	88.9	84.8	108	124.8	125.6	101	108	117
ほうれんそう	225	86.5	79.8	1,029	98.3	105.2	888	1,114	1,110
ねぎ	794	100.3	96.1	511	94.7	96.4	486	523	521
ブロッコリー	277	105.3	88.2	639	97.3	107.8	620	638	658
レタス類	1,401	69.8	82.9	295	147.1	124.9	188	303	445
きゅうり	1,275	83.5	80.5	446	101.7	115.4	419	477	449
なす	643	84.7	87.0	392	102.3	107.1	340	414	429
トマト	1,986	105.1	99.9	554	86.1	97.2	495	580	600
ピーマン	746	106.4	116.0	444	91.9	89.5	380	456	549
ばれいしょ	2,237	97.3	81.9	132	87.4	95.6	123	135	139
さといも	64	94.1	61.0	450	98.8	122.3	398	469	454
たまねぎ	4,542	112.2	102.5	105	59.0	81.0	107	107	100

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年(令和3～7年)平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

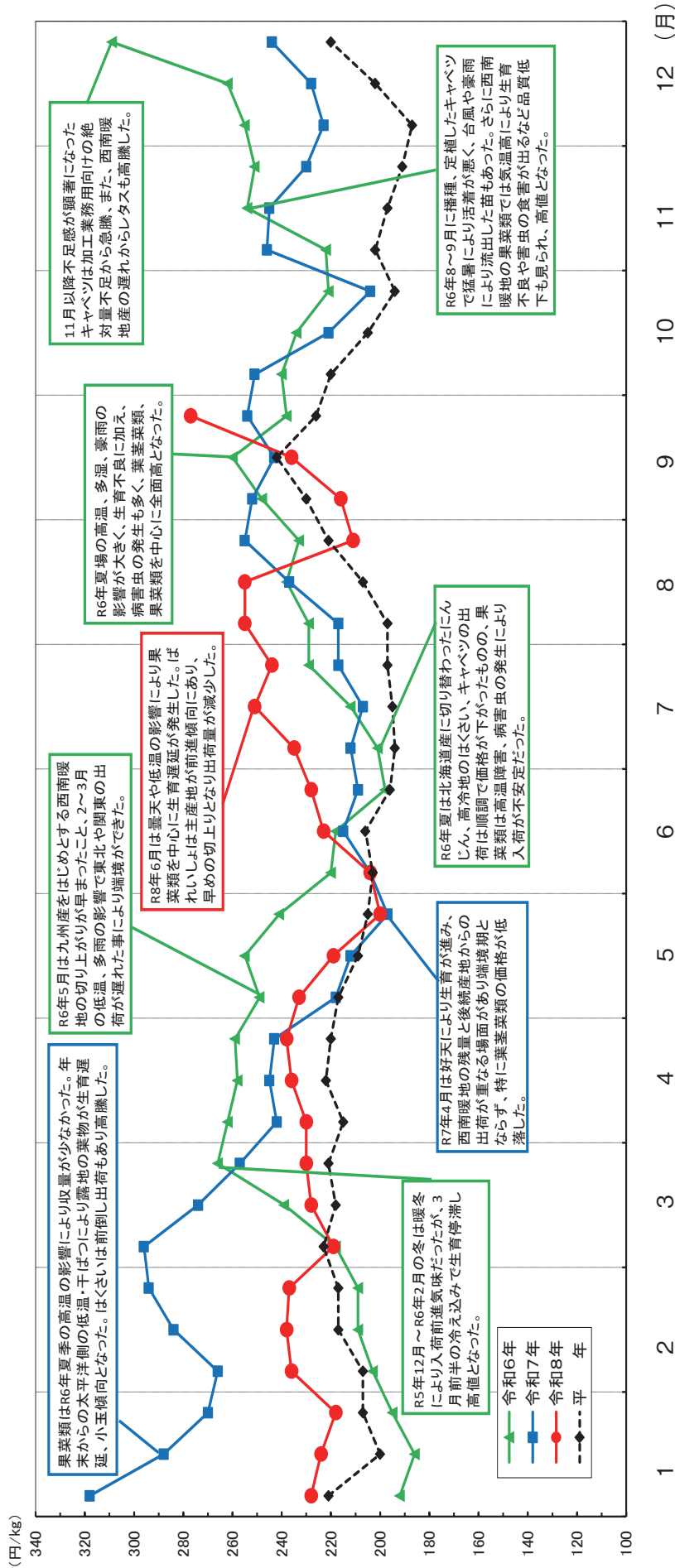
類別	品目	9月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産を中心に岐阜産、青森産が主体となる入荷であった。北海道産は太荷が少なく、中旬以降のサイズはL、Mが中心の出荷が続き、中旬以降の出荷量が伸び悩んだ。岐阜産は潤沢な出荷が続き、作が終盤に向かう中で旬を追うごとに入荷減量となったが、月間の入荷量は前年を大きく上回った。月間全体の入荷量は前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。 消費地では雨の日が多く野菜全体の消費が鈍く、入荷量が伸びない中で価格も伸び悩んだ。月間の価格は、前年をかなりの程度下回り、平年をやや下回った。
	にんじん 	北海道産中心の入荷であった。順調な産地出荷が続き、全旬を通じて安定した入荷となった。輸入の中国産の入荷もあったが、国産が潤沢なため入荷量は少なかった。月間全体の入荷量は前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに上回った。 価格は入荷量が多く安値傾向となった。悪天候から消費も鈍く、全旬を通じて価格は伸び悩んだ。月間では、前年をやや下回り、平年を大幅に下回った。

葉茎菜類	はくさい	長野産中心の入荷であった。長雨による日照量不足で生育不良となり、品質低下品も多く産地出荷量が少ない状況が続いた。中旬以降の入荷が不安定となり、入荷量は伸びなかった。月間に入荷量は、前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく下回った。 全旬を通じて入荷量も少ない中で加工筋を中心に引き合いが強く、価格は旬を追うごとに高騰し、下旬の価格は上旬の2倍以上となった。月間の価格は前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。
	キャベツ類	群馬産と長野産が中心の入荷があった。降雨続きで日照量が不足して生育不良となり、産地出荷量が少ない状況が続いた。品質低下品も多く、全旬を通じて入荷量が少ない状況が続いた。月間全体の入荷量は、前年、平年ともにかなり大きく下回った。 価格は不足感から高値となり、引き合いが強く旬を追うごとに上伸した。月間では前年、平年ともに2割以上上回った。
	ほうれんそう	岐阜産が中心の入荷であった。雨の日が多く、また曇天、日照不足も重なって生育不良となり、産地出荷量が少ない状況が続いた。入荷は不安定で全旬を通じて入荷量が少ない状況となり、月間に入荷量は少なかった前年をかなり大きく下回り、平年を2割以上下回った。 小売価格が高く、降雨続きの影響で消費は鈍化したが、野菜全体の不足感から引き合いはあり、価格は連休前の中旬に高騰し、高値で推移した。月間の価格は高値で推移した前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。
	ねぎ（白ねぎ）	北海道産、長野産、鳥取産が主体となった。各地とも降雨続きで日照量不足もあり、産地出荷量が少ない状況が続いた。北海道産は月の前半は比較的順調な入荷であったが下旬に落ち込んだ。長野産と鳥取産は全旬を通じて入荷量が少ない状況が続いた。月間全体の入荷量は、前年をかなり下回った。 価格は絶対量不足から高値で推移した。
	ねぎ（青ねぎ）	青ねぎは徳島産が中心となり、香川産、鳥取産、高知産などの入荷があった。細ねぎは静岡産と高知産が主体となる入荷であった。各地とも曇天、日照不足の影響により生育不良となり、産地出荷量が少ない状況が続いた。月間に入荷量は前年をかなり下回った。 小売価格が高い中でも引き合いがあり、不安定な入荷から高値が継続し、月間価格は前年を上回った。
	ブロッコリー	北海道産を中心に主力の長野産の入荷があった。降雨や曇天の日が多く生育が悪かったため、産地出荷量が少なく不安定な状況が続き、入荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は極端に少なかった前年をやや上回ったが、平年かなり大きく下回った。 価格は絶対量不足から高値となり、旬を追うごとに上伸した。月間の価格は、高値であった前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。
	レタス類	玉レタスは長野産中心の入荷であった。降雨や曇天の日が多く、日照不足もあり生育が悪く産地出荷量が少なく不安定な状況が続いた。旬を追うごとに入荷減量となり月間に入荷量は前年をかなり下回った。サニーレタスは長野産が中心となる入荷で、天候不順による生育不良から産地出荷量は伸びず、全旬を通じて入荷量が少ない状況が続いた。月間に入荷量は前年を大幅に下回った。リーフレタスも長野産が中心となる入荷で、玉レタスやサニーレタス同様に天候不順による生育不良のため産地出荷量が少なく不安定な状況が続いた。月間入荷量は前年を大きく下回った。レタス類全体でも月間全体の入荷量は少なく、前年を3割以上下回り、平年を大幅に下回った。 価格は玉レタス、サニーレタス、リーフレタスとも絶対量不足から高騰した。特にサニーレタスとリーフレタスは玉レタスの不足から引き合いが強まり、さらに高騰を続けた。月間全体の価格は、前年を5割近く上回り、平年を2割以上上回った。

果菜類	きゅうり	主力の福島産が中心となり、北海道産や群馬産、後続の大阪産などの入荷があった。東北産と北海道産は天候不順の影響で産地出荷量が減少したことに加えて、急な気温低下で切り上がり早く、旬を追うごとに入荷減量となった。後続産地も降雨と日照不足の影響により出遅れ気味で入荷量は伸びなかった。月間全体の入荷量は少なかった前年を大幅に下回り、平年を2割近く下回った。 価格は不足感が続く中で、量販店の特売や学校給食などの引合いが強く高値で推移した。月間では高かった前年をわずかに上回り、平年をかなり大きく上回った。
	なす	千両系は高知産と群馬産が主体となり、徳島産などの入荷があった。長茄子は愛媛産が主体となった。悪天候続きで生育が悪く、各産地とも産地出荷量が少なく不安定な入荷が続いた。本来はこの時期の主力の一つである京都産の入荷量は月間で前年の4割以下となった。後続産地の施設物は比較的順調な生育となったが、全体の入荷量の補填には至らなかった。月間全体の入荷量は前年、平年ともにかなり大きく下回った。 価格は不足感から旬を追うごとに上伸を続けたが、消費地の天候も悪く野菜全体の消費が鈍く伸び悩んだ。月間では前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。
	トマト	岐阜産が中心となり、主力の岡山産、愛媛産、熊本産などの入荷があった。各産地とも降雨や曇天の日が多く、日照不足が続き着色遅れと着果不良が多く、産地出荷量は伸びなかった。入荷量が増えない中でも小玉傾向で、消費地の天候も悪く消費は鈍化した。月間全体の入荷量は前年をやや上回り、平年並みであった。 悪天候続きで消費が鈍く加工筋の需要も低迷し、不足感から旬を追うごとに価格は上伸したが、月間の価格は前年をかなり大きく下回り、平年をわずかに下回った。
	ピーマン	西日本の主力産地の宮崎産や愛媛産は降雨や曇天の日が多く産地出荷量が伸びず、月間の入荷量は前年を大幅に下回った。北関東の茨城産や東北の青森産は同様に悪天候となる日が多い中でも比較的順調な出荷が続き、西日本産地の不足を補填する形で入荷量が増えた。月間全体の入荷量は前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。 価格は消費地の天候も悪く野菜全体の消費が落ち込んだ中で伸びず、月間の価格は前年、平年ともにかなりの程度下回った。
土物類	ばれいしょ	丸芋は北海道産中心の入荷であった。上旬は天候不順により早出しの産地の出荷量が少なく、中旬には台風の影響でコンテナ輸送が止まったことで出荷が滞り、入荷量は伸びなかった。作柄も悪く下旬も入荷量は伸びず、月間の入荷量は前年を大幅に下回った。メークインも北海道産の入荷で、月の前半は天候不順で早出しの産地の産地出荷量が少なかったが、後半は帯広地区が順調な出荷となり、月間の入荷量は前年をやや上回った。ばれいしょ全体では月間の入荷量は前年をわずかに下り、平年を大幅に下回った。 野菜全体の消費が鈍く、消費地も降雨続きで客足も遠のいたことから、売れ行きは芳しくなく荷動きも悪く滞った。入荷量が伸びない中でも価格は上昇せず、月間では高値だった前年をかなり大きく下回り、平年をやや下回った。
	さといも	上旬は宮崎産が主体となり、中旬以降は後続の愛媛産の入荷がスタートして主体となった。給食需要や月見需要がある中でも、消費地の悪天候で量販店の客足は遠く、消費は鈍く発注も少ない状況が続いた。業務関係では輸入の中国産の入荷もあったが引き合いは弱く、月間全体の入荷量は少なかった前年をやや下回り、平年を大幅に下回った。 価格は月見需要に向けて中旬に上伸したが、下旬には再び下落し、月間の価格は前年をわずかに下回り、平年を2割以上上回った。
	たまねぎ	北海道産を中心に、兵庫産の入荷があった。北海道産は豊作でL大サイズ中心の安定した入荷が続き、月間の入荷量は前年を大きく上回った。兵庫産は産地残量が少なく旬を追うごとに入荷減となり、月間の入荷量は前年を大幅に下回った。月間全体の入荷量は前年をかなり大きく上回り、平年をわずかに上回った。 価格は消費地の悪天候続きで客足が遠のき、野菜類全体の消費が鈍い中、需要が少なく、荷動きも悪かった。月間の価格は前年を4割以上下回り、平年を大幅に下回った。

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(参考) 指定野菜 (15品目) の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	240
令和7年	306	279	260	257	274	285	290	270	253	236	236	235
令和8年	222	215	210	229	231	233	215	221	223	230	236	238
平 年	214	193	199	200	210	211	216	213	215	211	218	216

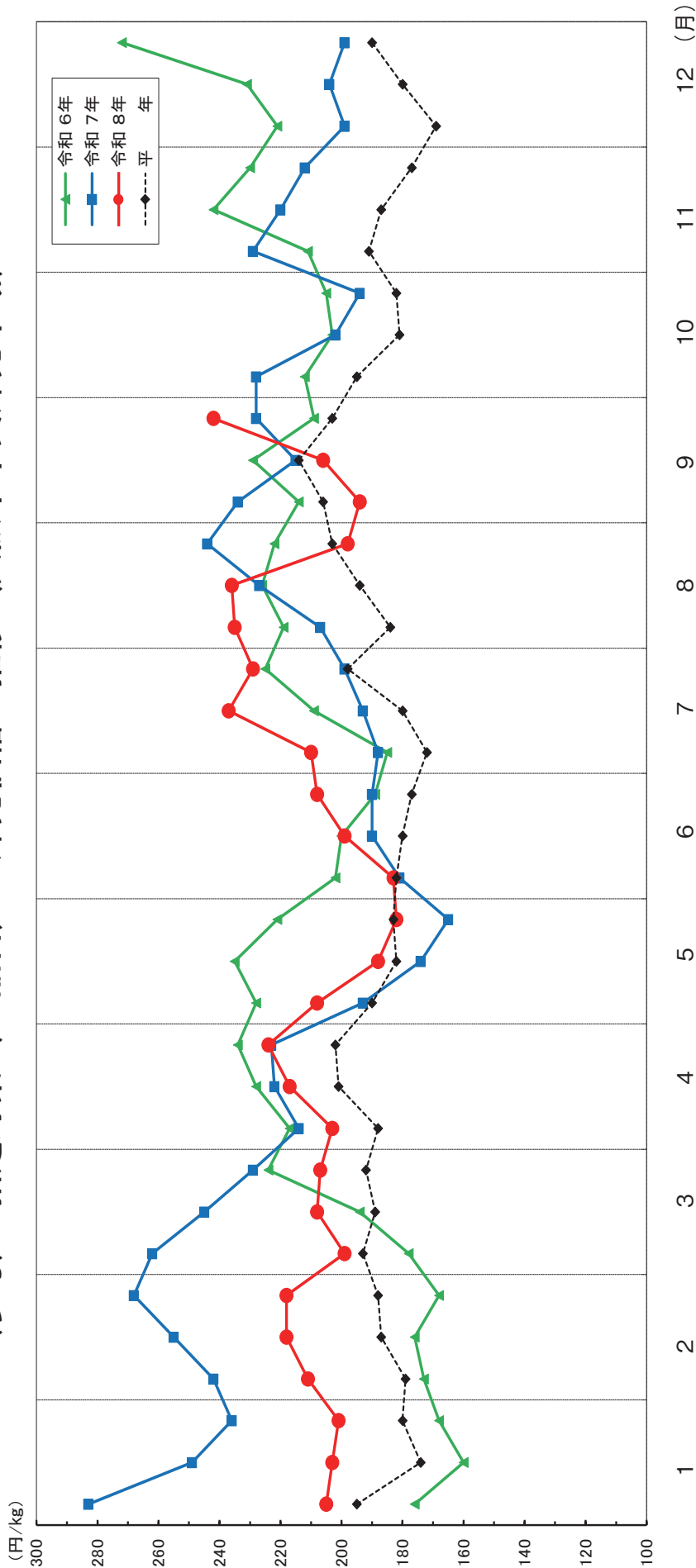
資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5カ年（令和3年～7年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

注3：令和8年6月号（4月実績掲載分）以降、指定野菜はプロコリーを含む15品目のデータである。なお、平年、令和6年、7年のデータもプロコリーを含む。

(参考) 指定野菜 (15品目) の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位: 円/kg)

資料: 農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1: 平年とは、過去5カ年(令和3年～7年)の旬別価格の平均値である。
注2: 大阪本場および大阪東部市場のデータである。
注3: 令和8年6月号(4月実績掲載分)以降、指定野菜はブロッコリーを含む15品目のデータである。なお、平年、令和6年、7年のデータもブロッコリーを含む。